

第五世代コンピュータの中心技術は Prolog でしたよね。知識処理（知識ベース）を中心にすえて、真実を確信するという機構に Prolog 的な考え方が重要なと思います。接地している事象はベースになっていて、今、人間から言われたことがこの接地に基づいているかということは、いろいろの断片的なリーズニングの言語表現から Prolog 的に推論して行くこととなります。人間は、推論が本物と接地していくと、そのパスは学習によって直接接地した知識として知識ベースに組み込みます。

真実は、センサーとアクチュエータの (key,value) セットによって接地され、支持されるものです。

尚、権威ある論文誌とか教科書の語りとか、誰それさんの語りとか、それぞれの語りは分離し、領野として管理し、その信憑性を、色々の人の発言から評価してレベル管理していきます。信憑性の高い領野の語りと低い領野の語りが一致しないときには、高い方を取るようになります。しかし、一番大事な評価は、人工知能自身の体験した領野の事象についてです。

おわり